うつ病治療に専念できる体制を構築 様々なアプローチ心の復興を支える

特定医療法人富尾会 桜が丘病院

個室44床の南館

精神科専門病院として1960（昭和35）年の開設以来、50余年の歴史を持つ桜庭丘病院。昨年発生した熊本地震でも心のケアがクローズアップされたが、「うつ病専門病棟」を始めとしたハード面はもとより、関係機関との連携強化や職員の能力向上などソフト面の充実を図り、「心の復興」にも一役買っている。

ドイツの病院の治療法を取り入れた水中歩行

図書コーナー

新入職員研修

多職種のチームの集中的な治療で平均在院日数は全国平均の3分の1

桜が丘病院は2003（平成15）年にうつ病専用病棟を開設し、うつ病の患者が入院治療を受けるに相応しい環境整備や、医療スタッフの治療レベル向上に努めてきた。また、個室44室を整備し、さまざまなタイプの疾病に対応できるよう配慮している。

入院治療は、退院後の生活までを見据えた治療計画を立案することから始まり、医師・看護師・作業療法士・臨床心理士・精神保健福祉士など多職種のチームで、集中的な治療を図っている。その具体的な成果として、同病院の平均在院日数は、全国平均の3分の1程度まで短縮することができている。

今年度発足の熊本県版DPATに2チームを登録

昨年の熊本地震では多くの人が避難所生活を余儀なくされ、避難生活の長期化やプライバシーのない集団生活による精神的問題などが問題となるなど、心のケアにもスポットが当てられた。地震発生直後から、全国各地の医療スタッフが続々と熊本に入り、災害派遣医療チーム（DMAT）や災害派遣精神医療チーム（DPAT）のコーディネートで、診療機能を喪失した病院等から即座に転院措置が取られた。

2003年5月に建設した北館

その後はチーム構成を変え、避難所の支援活動が続いた。各県から派遣のDPATチームが引き上げるのに伴い、熊本県単独の編成に同病院のDPATチームも加わり、避難所の巡回を約半年間行った。

そして今年6月29日には、「熊本DPAT」が発足し、同病院からも先遣隊に2チームを登録した。「そういう事態が起こらないことを祈りますが、医療機関としての社会的使命を果たしてまいります」と意気込みを語る。

保健所など関係機関と連携したアウトリーチ事業

高年齢者で物忘れが目立つようになると、まず認知症を疑われるが、精神科医が精査すると実はうつ病だったということがある。また、精神科に通院する患者の中には、薬の服用が不規則になって精神状態が悪化したり、引きこもりの生活に陥ってしまうこともある。

どちらの場合も精神科医療機関の受診が望ましいが、どこに行けばいいかわからないケースや、治療に対して拒否的であるケースもある。そこで同病院では数年前から、保健所などと連携し、精神保健福祉士が自宅を訪問し、必要に応じて医師が往診する体制を構築している。このような事業は、手を差し伸べるという意味で「アウトリーチ」と呼ばれている。精神疾患は一人ひとり、置かれた状況や病状も違うため、各種関係機関と連携しながらそれぞれに対して丁寧に向き合っていく。

チーム医療の礎となるコミュニケーションスキルを養う

また、同病院では人と関わる医療機関として、人材育成を重視して取り組んでいる。4月のオリエンテーションでは、病院の基本理念や目指す方向、チーム医療の理論と実践、医療機関で働く意味などについて3日間の集中講義を行う。6月にはチーム医療の土壌を豊かにするために、一泊研修で他部署の仲間との交流を深めるなど、コミュニケーションスキルの向上に努めている。

患者やスタッフはもちろん、患者の家族までが主体となって回復に向けて協働している同病院。他機関との連携によるアウトリーチ事業や優れた医療スタッフの育成などの取り組みを通して、社会に役立つ医療機関としての歩みを続けている。

理事長
堀田 宣之

DATA

所在地	〒860-0082 熊本市西区池田3丁目44-1
TEL	096-352-6264
設立	1960（昭和35）年
病床数	221床（精神一般167床、精神科急性期治療（1）54床）
職員数	220人
診療科目	精神科・内科・麻酔科
関連施設	訪問看護ステーション、精神科グループホーム